

第 4 部



キャリア教育 実践資料

- 学部別, 障害別実践ポイント
- 実践参考資料



第4部では, 第3部までの内容を受けて, 各学部別, 障害別の実践のポイントや, キャリア教育を進める上で参考になると思われる資料等を紹介します。

なお, 第4部の中で使用している写真は岩手県立花巻養護学校の授業の様子を許可を得て掲載しています。写真の無断転載や使用はご遠慮下さるようお願いいたします。

1 小学部におけるキャリア発達支援のポイント

- 「身辺自立の確立」と「人間関係の基盤形成」が目標。
- 「自分のことは自分でできる」ようになると、他人からの干渉が減り、精神的にも安定する。
- 保護者と連携した指導・支援ができるかどうか、重要なカギ。

1 「基本的な生活動作」や「基本的生活習慣」を身に付ける

【資料1】4歳の指導課題の例 (p.67参照)

実践例紹介 ①



朝の体力作り（運動）の後にタオルで汗を拭いてからTシャツを着替える児童。「さっぱりしたね」と声をかけ、着替えることの意味を教えます。



好きな食べ物は一口で食べてしまい、嫌いな食べ物は口にしない児童に、おかずを小さい容器に小分けして配膳し、ゆっくり食べたり、好き嫌いをなくす指導をしています。



絵カードを見ながら、歯磨きをしている児童。「下の前歯」→「右下の奥歯」等と絵カードを作成し、磨き残しがないように指導しています。

小学部段階から、特別支援学校に入学する児童には、障害の程度が重い場合や、行動面での課題のある場合（自閉症等）が多く見られます。

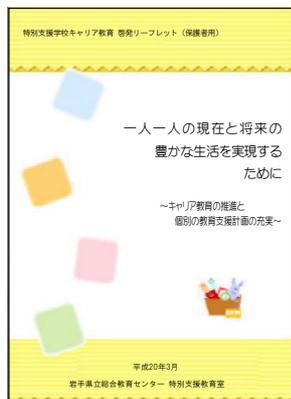
そのため、基本的な生活動作（歩く、座る、持つなど）や基本的生活習慣の獲得（食事、排泄、時間概念など）が、大きな目標になります。

定型発達の子どもの場合は、幼稚園入園の4歳（年少）頃には、身の回りのことがほとんどできるようになります。小学部には生活年齢で12歳までの児童が在学していますので、発達指数（DQ）等が30程度と障害の程度が重い場合であっても、根気よく、一貫して指導を行うことで、基本的な生活習慣を身に付けることができるはずなのです。

基本的な生活習慣は、大きくなってからでは身に付けることが難しく、小学部段階でしっかりと指導することが重要です（【資料1】）。

2 確かな見通しをもって指導・支援することが大切 ～ 個別の教育支援計画 ～

【資料2】キャリア教育啓発リーフレット（保護者用）
(p.68参照)



保護者に対してキャリア教育や個別の教育支援計画の意義や内容等を紹介するパンフレットを作成しました。

新入生の保護者や新年度に個別の教育支援計画の作成に関するお知らせ等をお渡しする際等に合わせてご活用下さい。

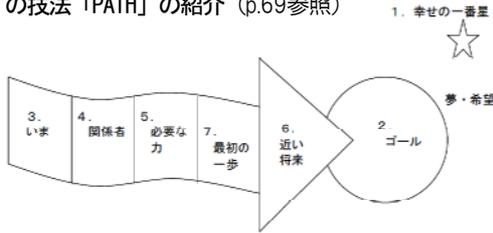
(A4版4ページ)

保護者の多くは、自分の子どもにも、障害のない子どもと同じような教育を受けさせ、同じように自立（就職）してほしいという願いをもっています。そのため、保護者の中には、普通の小学校と同じような教育をしてほしいとが、小学校の同じ学年の子どもと同じ学習をしてほしいと要望する方もいるかもしれません。

保護者の子どもの成長に対する不安感に寄り添いながら（理解を示しながら）も、教育のプロ、子どもの発達を支援するプロとして、一人一人の子どもの成長に確かな見通し（現在の指導課題を適切に設定する力）をもって、指導・支援にあたることのできる専門性が求められます。

個別の教育支援計画は、他機関との連携を促進するツールという役割だけでなく、中・長期的な子どもの発達について考えることができるものです（【資料2】）。

【資料3】関係者が連携して子どもの将来を考えるための技法「PATH」の紹介 (p.69参照)



将来的な見通しや夢をもちながら、子どもの発達を支援する手だてを小学部段階から十分にとるために、具体的に現実的な個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成できるよう工夫しましょう。本人や保護者の願いや思いに応えることが大切であり、思いや願いを育て、将来への具体的な夢を描くことができるようにすることが進路を支援することなのです（【資料3】）。

3 小学部段階での「働くこと」の指導のポイント

【資料4】家庭でできるお手伝いリスト (p.70参照)

【資料5】保護者との連携チェックリスト (p.71参照)

実践例紹介 ②



持ちやすい大きめのベグを決められた色に入れる学習をしている児童。色や形の弁別、分類の学習は、認知や文字の学習の基礎となる大切な取組の一つです。



貯金箱にお金を入れる児童。コインをつまむ、目的の場所に入れるという動作ができるようになると、自動販売機でジュースを買ってくるという活動にもつながります。



手順カード(写真)で、調理実習の手順の説明を聞いている児童。児童の状況に応じて、掲示したままにしたり、調理中に手元を持って行けるように工夫しています。



初めての作業や危険な作業では、後ろから指導者が手をとって一緒にすることも大切です。一緒にやることで、失敗も減り、安心して作業に取り組みます。



小さい紙を集めながらほうきをかける児童。目標物のない広い場所を掃除するのは意外に難しいものです。ゴミがなくなる様子が明確にわかることで達成感も得られます。



小学部の高学年以上になれば、給食の配膳もかなりの部分を子ども達だけでできるようになります。失敗することもあります。失敗も大切な勉強の一つです。



児童生徒昇降口に設置された進路等に関する情報の掲示板。小学部段階から進路や福祉に関する情報を保護者に十分に提供することが大切です。

(1) 「働くこと」には日常的な活動の全てが含まれる

「働く」とは、生産的な(何かを作る)活動だけを言うのではありません。食事の準備、後片付け、掃除、洗濯物を取り込む、布団を敷くなど日常的な活動の全てが「働く」ことなのです。「生活する力」を身に付けるということは、「働く力」を付けることと同じであるとも考えられます。

(2) 「働く」とは人の役に立つこと

「働く」とは、誰かの役に立つことです。自分勝手に自由に何かしている活動は、作業的な要素があっても、「働く」とは言いません。小学部段階から、人の役に立つ活動を十分に行うことの積み重ねが、中学部や高等部での作業学習の基礎になります。「教室のゴミを捨てる」「給食の牛乳を並べる」活動は、「働く」活動です。障害の程度が重い児童であっても、できる活動は必ずあります。指導者が児童の「働く」機会を奪わないように気を付けましょう。

(3) 「感謝される」ことで意欲が育つ

役に立つということは、周りの人から感謝されるということでもあります。ただ体験・経験させるのではないのです。「ありがとう」「助かったよ」ということを子どもに伝え、「役に立った」「よろこんでもらえた」という経験を積むことが大切なのです。「ありがとう」と言ってもらい、それを嬉しいと感じることで他の人にも「ありがとう」と感謝を伝えることができるようになります（【資料4】）。

(4) 「共同作業」を通して協力することを教える

「働く」活動には、協力・協調は欠かせないものです。相手に合わせたり、相手に合わせてもらうということは、教えて身に付くものではなく、人とのかかわりの体験の積み重ねにより身に付くものです。「遊びの指導」や「生活単元学習」の中に意図的に共同作業を必要とする活動を取り入れて、協力することを教えます。

(5) 「家庭生活」との連携を大切に

「働く」活動は家庭の中の方がたくさんあります。家の外(学校)で、働くことができても、家で働けないのでは将来の生活に結び付きません。学校でできることは、家でもできるように、また、家でできていることは学校でもできるようにすることが大切であり、そのためには、保護者との信頼関係に基づいた連携が必要なのです（【資料5】）。

2

中学部におけるキャリア 発達支援のポイント

- 基本的な「社会生活能力」と「自己表現力」の育成が目標。
- 学習の効果も出やすく、最も伸びる時期。学習したことが生活に結び付き、自分の生活が豊かに広がっていくことを実感させたい。
- 自分のことは自分で当たり前に行える、自立性を促すことがポイント。

1 「社会生活能力」と「自己表現力」を育てる ～人とのかかわりの中で身に付ける～

■ 地域での活動を積極的に取り入れる

* 授業や家庭、寄宿舎等の活動で、地域に出かけたり、地域の人と触れ合う機会を積極的に設けます。

- ・ 近隣又は出身地域の学校と交流する
- ・ 地域の社会資源（図書館等）を利用する
- ・ お祭り等に参加する
- ・ ボランティア活動を行う
- ・ スーパーに買い物に行く
- ・ 一人で通学する など

■ 自分の気持ちを表現できるようにする

うまく話ができなくても、楽しいときは「楽しい表情」をする、つらいときには「つらい表情」をして相手に伝えることができます。

表情カードや鏡を使って、「笑った顔」「怒った顔」をする練習や、相手の表情を読み取る練習をすることで自分の気持ちを相手に伝えたり、他の人の気持ちを察することができるようになることにもつながります。

【資料6】自己表現の大切さと指導（p.72参照）

小学部で自分の身の回りのことができる力が身に付いていれば、中学部で学習できる内容は大きく広がります。

社会生活能力とは、社会（集団）の中で適切に生活することができる能力のことであるため、人とのかかわりの中で、つまり、実際的な生活の中で身に付けることが大切になります。

また、集団生活や社会生活の中では、人に協力を求めたり、自分の気持ちを伝えたりする力が求められます。自分の気持ちや意思を表現する力も、自立に向けて大切な力の一つであり、この力も人とのかかわりの中でしか身に付けることはできません。自分の気持ちや意思を伝え、わかってもらえる、認めってもらえる経験を積むとともに相手の意図を理解する力も育てていくことが大切です（【資料6】）。

2 いろいろな活動ができる中学部

～一人一人が輝く活動しよう～

実践例紹介 ③



修学旅行に行った報告している生徒。一人一人自分のことばで楽しかった活動や発見を発表しています。写真を大きく写すことで、下級生にもわかりやすく伝えていきます。



国語のプリントに取り組む生徒。生徒ができる内容や生活に関連する内容を取り上げるなど、プリント学習にも一人で取り組みむための工夫をしています。



PTAバザーで作業学習の製品を販売している様子。「いらっしゃいませ」「ありがとうございました」と大きな声で呼び込みをしたり、電卓で売り上げを計算したりします。

中学部になると、体も大きくなり、できる活動が飛躍的に増えます。また、小学部で学習してきた認知発達を促す学習（文字や数量の基礎となる学習）の成果も表れ、教科的な学習にも取り組みやすくなります。

中学部は、学校らしい生活を最も多く経験させることができる時期でもあります。高等部では、中学校からの入学者も多くなり集団の中に埋もれてしまったり、入学時から進路を意識した活動が多くなったりなど、学校生活の中で自分の能力を十分に発揮する機会が少なくなることも生徒によってはあるかもしれないからです。

生徒のできる活動、できるようになった活動を学校生活の中で積極的に取り入れ、当たり前に行えるようになるよう指導・支援します。自信をもって取り組めることを増やすことが、生徒の自立性を高め、自分の将来の夢を具体的に描く力につながるのです。

3 正しい自己理解を促す支援

～ できないこともあるけど、できることもいっぱいある ～

■性教育とキャリア発達

男女の性の差がはっきりとしてくる中学部においては、性に関する指導を実態に応じて行っていくことも必要です。正しい知識を学ぶ機会がなかったために、さまざまなトラブルに巻き込まれた事例が数多くあります。

性教育は生命の尊重や個人の尊厳を学ぶことでもあり、男女が互いの違いを認め合い、協力し合うことを教えることでもあります。ライフステージにあったキャリア発達を支援する視点からも、性教育は非常に大切なことです。

【資料7】性教育の大切さと指導 (p.73参照)

中学部になると、自分が一人でできることと、一人では難しいことが、だんだんと理解できるようになってきます。また、自分と他の人の違いについても、意識するようになります。

生徒に自己理解を促すポイントは、まずはその生徒のできることや良さをたくさん伝え、自分に自信を付けることです。次に、周囲の友だちの良いところを伝えます。お互いの良いところの違いを認め合うことで、自分を客観的に見るができるようになるのです。悪いところを指摘するだけの指導では、自己防衛的になってしまい、自分を正しく見る力が育ちません。

4 中学部段階での「働くこと」の指導のポイント

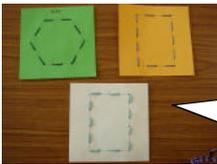
実践例紹介 ④



校庭で体力作りに取り組む生徒。働くためには健康で丈夫な体を作ることが大切です。毎日、続けることで、少しずつ長い距離も走れるようになります。



ひもとおしの学習に取り組む生徒。生徒の段階に応じてひもや板の材質を工夫しています。個別の学習の時間では教科的な学習だけでなく、作業能力の基礎も育てます。



厚紙に簡単な刺し子をする学習。布で練習するよりも、手軽に取り組めます。最初の頃は力加減ができず紙がぼろぼろになることもあったそうですが徐々に上手になりました。



木版カレンダー。一人一人がパーツに決められた色をローラーでつけ、それをまとめて作品に仕上げています。だれにでも出来る活動で、すぐに結果を確認できる題材です。



紙すきの作業学習の様子。作業台の配置を工夫することで、工程全体を見通すことができ、自分の担当している作業の役割を理解することができます。



作成した製品の数を表している掲示物。付箋紙を活用して作成しています。今日の作業量の確認や、今までの作業の状況を目で見て確認できます。良い製品を作るためには、生徒自身が製品の良否を見極める力をもつことが必要です。何事も最初が肝心。とりあえず作業すれば良いという姿勢では、丁寧さも確実さも身に付きません。

(1) 「働く意欲」や「働く喜び」を教える

「働く意欲」を付けるためには、働くことの意味を生徒に理解させる必要があります。働くことを学ぶ意義を「就職するため」「給料をもらうため」とだけ教えるのではなく、「働くことそのものの楽しさや喜び」を教える必要があります。働くとは誰かの役に立つことであり、自分の存在が認められることでもあります。一つのことを成し遂げる充実感や達成感を感じられる機会を多く作ることが、「働く意欲」の育成につながります。

(2) 「作業学習」では生産的な活動を行う

中学部になると多くの特別支援学校では「作業学習」に取り組めます。作業学習は、小学部で行うような工場的な活動ではなく、生活の中で役に立つ物を作るという生産的な活動であることが大切です。生徒が創造性を発揮して自由に作るというよりは、決められた形のものを決められた手順で作る、規格にあったものを作ることが求められます。

ただ作業させればよい、何かを作ればよいというのではなく、正しく作ること、良い品物を作ることの大切さを教えます。

(3) 物を作ることの喜びを教える

中学部では、物をたくさん作るというよりも、じっくりと時間をかけてでも良い製品を作るということを大切にします。また、教師が手をかけなくても、できるだけ一人で取り組めるようにすることが、意欲的に作業に取り組む力を育てます。そのためには、一人一人の生徒にあった補助具や手順を工夫することが必要です。規格品を作るというのは、できたかどうかを自分で判断することを教えることでもあります。

自分の力だけで良い物を作ることができた時の、生徒の喜びは非常に大きく、自立に向けた自信にもつながります。物を作る喜びは、良い物を作り上げたときに生じるのです。いいかげんなものは作らないという姿勢が大切です。